(19)日本国特許庁(JP)　(12)公開特許公報(A)　(11)特許出願公開番号
特開2014-100247
(P2014-100247A)
(43)公開日　平成26年6月5日(2014.6.5)

(51)Int.Cl.		F I		テーマコード（参考）
A47C 11/00	(2006.01)	A47C 11/00		3B095
B63C 9/04	(2006.01)	B63C 9/04	Z	

審査請求 未請求　請求項の数 7　ＯＬ　（全 10 頁）

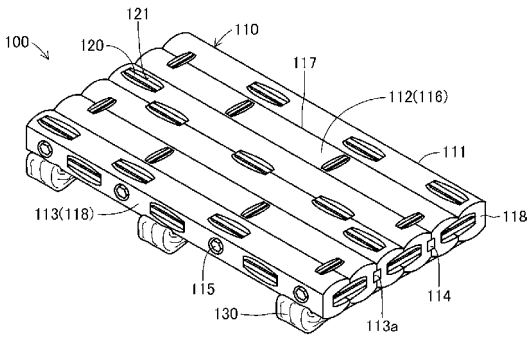
(21)出願番号　特願2012-253595 (P2012-253595)
(22)出願日　平成24年11月19日 (2012.11.19)

(71)出願人　512299196
武内　隆志
静岡県浜松市東区積志町１９－５
(74)代理人　100136674
弁理士　居藤　洋之
(72)発明者　武内隆志
静岡県浜松市東区積志町１９－５

Ｆターム(参考)　3B095 AC04

(54)【発明の名称】筏ベンチ

(57)【要約】
【課題】小型且つ低コストで製作できるとともに災害時のみだけなく平時においても使用用途を有する筏ベンチを提供する。
【解決手段】筏ベンチ１００は、筏本体１１０と支持台１３０とで構成されている。筏本体１１０は、棒状に形成された複数の基材１１１を互いに連結して構成されている。基材１１１は、丸太状の間伐材を２面カットして構成されている。筏本体１１０の筏表裏面１１６および筏側面１１８には、複数の把持部１２０が形成されている。把持部１２０は、筏本体１１０の表面から突出することなく同表面より内側に露出して形成されている。この筏本体１１０は、砂袋で構成された支持台１３０を介して屋外に人が腰掛けることができる高さ位置に非固定状態で設置される。そして、筏本体１１０は、平時にはベンチとして使用されるとともに津波発生時には支持台１３０上から離脱して浮くことにより救命筏として使用される。
【選択図】　図１



【特許請求の範囲】
【請求項１】
複数の棒状の基材を互いに連結して水に浮くように構成した筏本体と、
前記筏本体の表面から突出することなく露出する把持部とを備え、
前記筏本体は、屋外に人が腰掛けることができる高さ位置に非固定状態で設置されていることを特徴とする筏ベンチ。
【請求項２】
請求項１に記載した筏ベンチにおいて、
前記把持部は、少なくとも前記筏本体における側面に設けられていることを特徴とする筏ベンチ。
【請求項３】
請求項１または請求項２に記載した筏ベンチにおいて、
前記筏本体は、互いに隣り合う前記基材における各角部の少なくとも一方が凹んで形成されていることを特徴とする筏ベンチ。
【請求項４】
請求項１ないし請求項３のうちのいずれか１つに記載した筏ベンチにおいて、さらに、
前記筏本体を設置面上から浮かした状態で支持する支持台を備えることを特徴とする筏ベンチ。
【請求項５】
請求項１ないし請求項４のうちのいずれか１つに記載した筏ベンチにおいて、
前記筏本体は、互いに隣り合う前記基材間にサネ加工、ジベル加工またはダボ加工が施されていることを特徴とする筏ベンチ。
【請求項６】
請求項１ないし請求項５のうちのいずれか１つに記載した筏ベンチにおいて、
前記把持部は、前記筏本体を構成する前記基材間に跨って形成されていることを特徴とする筏ベンチ。
【請求項７】
請求項１ないし請求項６のうちのいずれか１つに記載した筏ベンチにおいて、
前記筏本体は、前記筏本体の外周部を構成する前記基材と同外周部より内側を構成する前記基材とで比重が異なることを特徴とする筏ベンチ。
【発明の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
本発明は、平時はベンチとして使用しつつ災害時に救命筏として使用することができる筏ベンチに関する。
【背景技術】
【０００２】
平成２３年３月１１日に発生した所謂東日本大震災以降、津波から人命や財産を守るために種々の救命筏が提案されている。例えば、下記特許文献１には、廃車された自動車に対して発泡樹脂などを装着して浮力を持たせるとともに車内への浸水防止の処置を施して津波発生時に車内に乗り込むことができる車両型の救命筏が開示されている。また、下記特許文献２には、水に浮く箱型に形成されて津波発生時に内部に乗り込むことができる箱型の救命筏が開示されている。
【先行技術文献】
【特許文献】
【０００３】
【特許文献１】実用新案登録第３１７５０９３号公報
【特許文献２】実用新案登録第３１７７７３３号公報
【０００４】
しかしながら、上記特許文献１，２に記載された救命筏においては、物理的な構成が大

きいため広い設置スペースが必要となって設置場所が限定されるとともに１台の製作費も高額なため、広く一般に普及させることができないという問題があった。また、上記特許文献１，２に記載された救命筏においては、災害時の救命用途以外に平時においての使用用途がなく設置スペースや製作費に対する利用効率が低いという問題もあった。

【０００５】

本発明は上記問題に対処するためなされたもので、その目的は、小型且つ低コストで製作できるとともに災害時のみだけなく平時においても使用用途を有する筏ベンチを提供することにある。

【発明の概要】

【０００６】

上記目的を達成するため、本発明の特徴は、複数の棒状の基材を互いに連結して水に浮くように構成した筏本体と、筏本体の表面から突出することなく露出する把持部とを備え、筏本体は、屋外に人が腰掛けることができる高さ位置に非固定状態で設置されていることにある。

【０００７】

このように構成した本発明の特徴によれば、筏ベンチは、水に浮く筏本体が屋外における人が腰掛けることができる高さ位置に非固定状態で設置されている。これにより、筏ベンチは、平時においてはベンチとして使用することができるとともに、津波発生時においては設置面に対して非固定状態であるため救命筏として使用することができる。この場合、筏ベンチは、筏本体の表面から突出することなく露出する把持部が設けられているため、平時においては把持部がベンチとしての使用の妨げにならないとともに、津波に流されている場合においては衝突による破損を防止しつつ漂流する筏本体に容易に掴まることができる。なお、筏ベンチの設置場所は、津波の発生時に津波に乗って流される場所、すなわち、屋外であればどこに設置してもよく、例えば、公園、広場、空き地、道端、駐車場、学校・役場・病院などの各種施設の敷地内における空きスペース、個人宅の庭、学校の屋外興行施設の観客席、駅のホームまたはビルの屋上などが好適な設置場所として考えられる。

【０００８】

また、本発明の他の特徴は、前記筏ベンチにおいて、把持部は、少なくとも筏本体における側面に設けられていることにある。

【０００９】

このように構成した本発明の他の特徴によれば、筏ベンチは、把持部が少なくとも筏本体における側面に設けられているため、平時においては把持部がベンチとしての使用の妨げにならないとともに津波に流されている場合においては漂流する筏ベンチに容易に掴まることができる。

【００１０】

また、本発明の他の特徴は、前記筏ベンチにおいて、筏本体は、互いに隣り合う基材における各角部の少なくとも一方が凹んで形成されていることにある。

【００１１】

このように構成した本発明の他の特徴によれば、筏ベンチは、筏本体を構成する互いに隣り合う前記基材における各角部のうちの少なくとも一方が凹んで形成されているため、筏ベンチが漂流している場合などにおいて互いに隣接する基材同士の隙間が開いたり閉じたりすることによって基材間に手などを挟むことを防止することができる。

【００１２】

また、本発明の他の特徴は、前記筏ベンチにおいて、さらに、筏本体を設置面上から浮かした状態で支持する支持台を備えることにある。

【００１３】

このように構成した本発明の他の特徴によれば、筏ベンチは、筏本体を設置面上から浮かした状態で支持する支持台を備えているため、筏ベンチの設置面と筏本体との間の風通しを確保して筏本体の腐食や虫食いによる劣化を防止することができる。

【００１４】
　また、本発明の他の特徴は、前記筏ベンチにおいて、筏本体は、互いに隣り合う基材間にサネ加工、ジベル加工またはダボ加工が施されていることにある。
【００１５】
　このように構成した本発明の他の特徴によれば、筏ベンチは、筏本体における互いに隣り合う基材間にサネ加工またはジベル加工が施されているため、筏本体を構成する基材間のずれを防止することができ、筏本体の形状を安定期に保持することができる。
【００１６】
　また、本発明の他の特徴は、前記筏ベンチにおいて、把持部は、筏本体を構成する基材間に跨って形成されていることにある。
【００１７】
　このように構成した本発明の他の特徴によれば、筏ベンチは、把持部が筏本体を構成する基材間に跨って形成されているため、筏本体の上面に形成された把持部においては把持部を納める筏本体の窪み内に水が溜まることを防止することができ、筏ベンチのベンチおよび筏としての使用感を向上させることができる。
【００１８】
　また、本発明の他の特徴は、前記筏ベンチにおいて、筏本体は、筏本体の外周部を構成する基材と同外周部より内側を構成する基材とで比重が異なることにある。
【００１９】
　このように構成した本発明の他の特徴によれば、筏ベンチは、例えば、筏本体の外周部を構成する基材の比重を同外周部より内側を構成する基材よりも重く形成することにより、筏ベンチが漂流している場合において筏本体を安定させるとともに波や津波に流される人が掴まった際に筏本体が転覆することを抑制することができる。また、例えば、筏本体の外周部を構成する基材の比重を同外周部より内側を構成する基材よりも軽く形成することにより、筏本体が漂流している場合において津波に流されている人が筏本体に乗り込む際に筏本体を容易に傾斜させて筏本体に乗り込ませることができる。
【図面の簡単な説明】
【００２０】
【図１】本発明の一実施形態に係る筏ベンチの外観構成の概略を平時の使用状態で示した斜視図である。
【図２】図１に示す筏ベンチの外観構成の概略を示す側面図である。
【図３】図１に示す筏ベンチの外観構成の概略を津波発生時の使用状態で示した斜視図である。
【発明を実施するための形態】
【００２１】
　以下、本発明に係る筏ベンチの一実施形態について図面を参照しながら説明する。図１は、本発明の一実施形態に係る筏ベンチ１００の外観構成の概略を平時の使用状態で示した斜視図である。また、図２は、図１に示す筏ベンチ１００の外観構成の概略を示す側面図である。なお、本明細書において参照する各図は、本発明の理解を容易にするために一部の構成要素を誇張して表わすなど模式的に表していることがあるため、各構成要素間の寸法や比率などは異なっていることがある。この筏ベンチ１００は、平時においては公園などに設置されてベンチとして使用され、津波の発生時において津波に乗って漂流する救命筏として用いられるものである。
【００２２】
（筏ベンチ１００の構成）
　この筏ベンチ１００は、筏本体１１０を備えている。筏本体１１０は、平時においてはベンチとして用いられるとともに津波発生時においては筏として機能する構造体であり、人が乗ることができる大きさの平板状に延びて構成されている。この筏本体１１０は、棒状に延びる複数の基材１１１を互いに連結することによって定員内の人が乗っても沈むことなく浮くことができるように構成されている。

【００２３】
基材１１１は、筏本体１１０を構成する部品であり、木材などの水に浮く部材で構成されている。本実施形態においては、基材１１１は、スギの間伐材を用いて構成されているが、他の間伐材、例えばヒノキなどの間伐材であってもよいことは当然である。この基材１１１は、外表面が互いに対向する２つの基材表裏面１１２とこれら２つの基材表裏面１１２間で互いに対向する２つの基材側面１１３とで構成されている。これらのうち、２つの基材表裏面１１２は、人が腰掛けまたは乗る部分を構成する面であり凸状の湾曲する円弧状に形成されている。
【００２４】
一方、２つの基材側面１１３は、基材１１１同士が接触し合うまたは筏本体１１０の側面を構成する面であり平面状に形成されている。また、これら２つの基材側面１１３のうち基材１１１同士が接触し合う基材側面１１３には、長手方向に凹状に凹んだメスザネ１１３ａが形成されている。メスザネ１１３ａは、基材１１１間のずれを防止しつつ基材１１１同士を連結する部分である。
【００２５】
そして、この基材１１１は、複数の基材１１１が互いに連結されることによって筏本体１１０構成している。具体的には、これら複数の基材１１１は、複数の基材１１１におけるメスザネ１１３ａが形成された基材側面１１３同士をオスザネ１１４を介して接触させた状態で固定具１１５によって互いに連結されている。この場合、オスザネ１１４は、基材１１１の基材側面１１３に形成されたメスザネ１１３ａに嵌り込む棒状の部材であり、基材１１１の長さ以下の長さでかつ断面が方形に形成されている。本実施形態においては、オスザネ１１４は、基材１１１と同じスギの間伐材を用いて構成されているが、他の間伐材、例えばヒノキなどの間伐材であってもよいことは当然である。
【００２６】
固定具１１５は、複数の基材１１１を連結するための締付具であり、筏本体１１０を構成する複数の基材１１１を貫通する長さステンレス製のボルトとこのボルトに噛み合うステンレス製のナット（図示せず）とで構成されている。この場合、筏本体１１０における両端に形成される基材１１１の基材側面１１３には、所謂ザグリ穴がそれぞれ形成されており、固定ボルト１１５は固定ボルト１１５の両端部が基材側面１１３の表面から突出しない長さに形成されている。本実施形態においては、筏本体１１０は、６つの基材１１１を６つのオスザネ１１４を介してそれぞれ配置した状態で４つの固定ボルト１１５によって固定することにより構成されている。この場合、本実施形態においては、基材１１１は、直径が２５ｃｍで長さが３ｍのスギの丸太材を２面カットして構成されている。
【００２７】
複数の基材１１１の各基材表裏面１１２によって面状に広がって形成された筏本体１１０における筏表裏面１１６には、基材表裏面１１２によって逃げ部１１７が形成されている。逃げ部１１７は、筏本体１１０に人が乗った場合や筏ベンチ１００を筏として使用している場合において基材１１１同士が動いて基材１１１同士間に一時的に隙間が生じた際にこの隙間に指、手または衣類などが挟み込まれないようにする部分であり、筏表裏面１１６の表面から凹状に窪んで形成されている。本実施形態においては、逃げ部１１７は、基材表裏面１１２を円弧状に形成することにより基材１１１の角部を逃がした形状に形成されている。
【００２８】
また、複数の基材１１１の各端面および複数の基材１１１における最も外側に配置された基材１１１の基材側面１１３によって形成された筏本体１１０における筏側面１１８および前記筏表裏面１１６には、把持部１２０がそれぞれ形成されている。
【００２９】
把持部１２０は、筏ベンチ１００を筏として使用している場合において筏本体１１０に掴まる部分であり、樹脂製の棒状の取っ手によって構成されている。この場合、把持部１２０は、筏本体１１０の表面に凹状に窪んで形成された凹部１２１に内に設けられて筏本

体１１０の表面から突出しないように同表面より内側に設けられている。この場合、把持部１２０が筏本体１１０の表面から突出とは、筏本体１１０の表面と面一以下が好ましいが、実質的には筏本体１１０のベンチとして使用時および救命筏としての使用時において他の物体との衝突による破損を防止しつつ人体に接触した際に危害を与えない範囲で具体的には筏本体１１０の表面から３０ｍｍ以下の突出範囲が適している。また、把持部１２０は、筏本体１１０における１つの基材１１１内または２つの基材１１１間に跨るようにそれぞれ設けてられている。

【００３０】

この把持部１２０は、筏本体１１０がどのような向きや姿勢で漂流した場合であっても把持部１２０を確保するために、筏本体１１０における表裏面１１６および筏側面１１８にそれぞれ複数個ずつ設けられている。この場合、筏本体１１０における４つの筏側面１１８にそれぞれ形成される把持部１２０は、同筏側面１１８の形成方向に沿って延びて形成されている。また、筏本体１１０における２つの筏表裏面１１６にそれぞれ形成される把持部１２０は、筏本体１１０の長手方向に平行な向きと直交する向きとでそれぞれ形成される。

【００３１】

この筏本体１１０は、支持台１３０上に支持されている。支持台１３０は、筏本体１１０を筏本体１１０の設置面Ｇから浮かした状態で支持するための台であり、筏本体１１０の設置面Ｇ上に配置されている。本実施形態においては、支持台１３０は、複数の土嚢袋にそれぞれ砂を充填した所謂砂袋で構成されている。

【００３２】

（筏ベンチ１００の作動）

次に、このように構成した筏ベンチ１００の作動について説明する。まず、筏ベンチ１００を設置する作業者は、筏本体１１０と支持台１３０とをそれぞれ用意する。本実施形態においては、１つの筏本体１１０に対して１２個の支持台１３０を用意する。次に、作業者は、筏ベンチ１００を設置する公園などの設置場所に支持台１３０を筏本体１１０の大きさおよび形状に応じて配置する。本実施形態においては、筏本体１１０の両端および中央部の３ヶ所に４つずつの支持台１３０を一列に並べて配置する。

【００３３】

次に、作業者は、支持台１３０上に筏本体１１０を載置する。この場合、作業者は、複数人の作業者によって筏本体１１０を持ち上げて支持台１３０上に載置することができるとともに、クレーンなどの重機を用いて筏本体１１０を持ち上げて支持台１３０上に載置することもできる。また、この場合、作業者は、筏本体１１０における２つの筏表裏面１１６が互いに同一に形成されているため、どちらの面を上側または下側に向けてもよい。

【００３４】

次に、作業者は、筏本体１１０における図示上側の筏表裏面１１６を水平にする。具体的には、作業者は、水準器などを用いて筏表裏面１１６の水平度を確認しながら筏表裏面１１６を叩いたり乗ったりなどして筏表裏面１１６を水平にする。この場合、筏本体１１０を支持する支持台１３０が所謂砂袋で構成されているため、作業者は容易に筏表裏面１１６を水平にすることができる。また、筏本体１１０を設置する高さは、筏表裏面１１６上に腰掛けることができる適当な範囲の高さに設定される。これにより、筏ベンチ１００の設置作業は完了する。すなわち、筏ベンチ１００は、筏本体１１０が支持台１３０に単に載っているだけで設置面Ｇに対して非固定状態で設置される。

【００３５】

このように設置された筏ベンチ１００は、平時においてはベンチとして用いられる。そして、災害発生時、具体的には、津波が発生した場合においては、図３に示すように、筏本体１１０は津波とともに流される。この場合、筏本体１１０は、支持台１３０上に単に載置されており設置面Ｇに対して非固定状態であるため、津波によって容易に流される。また、筏本体１１０は、水に浮くように構成されているため津波に一時的に飲み込まれた場合であっても沈むことはない。

【００３６】
筏本体１１０が津波に流された場合においては、筏本体１１０は津波上を漂流する。したがって、津波に流されている人は筏本体１１０に掴まるまたは筏本体１１０上に乗ることによって津波の難から逃れることができる。この場合、筏本体１１０の付近で流されている人や筏本体１１０上に乗っている人は、筏本体１１０の至る所に設けられている把持部１２０を掴むことにより筏本体１１０を掴むことができるとともに筏本体１１０から離脱することが防止される。そして、津波が収まった後は、筏本体１１０を支持台１３０上に設置して再びベンチとして使用することができる。なお、津波発生時に筏本体１１０の近くに居る場合おいては、津波が襲来する前に筏本体１１０に乗って津波の襲来に備えることもできる。
【００３７】
上記作動説明からも理解できるように、上記実施形態によれば、筏ベンチ１００は、水に浮く筏本体１１０が屋外における人が腰掛けることができる高さ位置に非固定状態で設置されている。これにより、筏ベンチ１００は、平時においてはベンチとして使用することができるとともに、津波発生時においては設置面Ｇに対して非固定状態であるため救命筏として使用することができる。この場合、筏ベンチ１００は、把持部１２０が筏本体１１０の表面より内側に設けられて同表面に突出しない状態で露出して設けられているため、平時においては把持部１２０がベンチとしての使用の妨げにならないとともに津波に流されている場合においては漂流する筏本体１１０に容易に掴まることができる。
【００３８】
さらに、本発明の実施にあたっては、上記実施形態に限定されるものではなく、本発明の目的を逸脱しない限りにおいて種々の変更が可能である。
【００３９】
例えば、上記実施形態においては、筏本体１１０は、複数の基材１１１を平行に並べて互いに連結することにより構成した。しかし、筏本体１１０は、複数の基材１１１を互いに連結して構成されていればよく、必ずしも上記実施形態に限定されるものではない。したがって、筏本体１１０は、複数の基材１１１を井桁に組んだり、互いに積み重ねたりして構成することもできる。これらの場合、基材１１１同士の連結は、ボルトとナットとで構成される固定具１１５に限られず、縄、ワイヤーまたは釘などを用いて連結することができる。また、これらの場合、固定具１１５に代えて、または加えて基材１１１同士を直接嵌合させて連結することもできる。すなわち、筏本体１１０は、固定具１１５を省略して構成することもできる。
【００４０】
また、上記実施形態においては、筏本体１１０は、平面視で長方形状に形成した。しかし、筏本体１１０の形状や大きさは、設置場所や乗船定員などに応じて適宜設定されればよく、必ずしも上記実施形態に限定されるものではない。したがって、筏本体１１０は、三角形、正方形または六角形などの多角形、円形または楕円形を単体でまたはこれらを適宜組み合わせて構成することができる。また、筏本体１１０は、筏表裏面１１６を貫通する貫通孔を設けてリング状または穴あき状に構成することもできる。これによれば、筏本体１１０は、津波に流されている場合における筏本体１１０へのアクセス、例えば、筏本体１１０の真下を流される人の筏本体１１０へのアクセスを容易にすることができる。
【００４１】
また、上記実施形態においては、筏本体１１０は、基材１１１にメスザネ１１３ａを形成するとともに２つの基材１１１間おけるメスザネ１１３ａ間にオスザネ１１４を嵌合して構成した。すなわち、筏本体１１０は、互いに隣接する基材１１１間にサネ加工を施して形成した。この場合、サネ加工は、筏本体１１０における基材１１１間のずれを防止できれば、必ずしも上記実施形態に限定されるものではない。したがって、筏本体１１０は、サネ加工以外の方法、例えば、ジベル加工やダボ加工によって互いに隣接する基材１１１同士を連結することもできる。この場合、ジベル加工とは、互いに隣接する２つの基材１１１間に平面板状や波板状の板材を基材１１１の長手方向に沿って互いに挿し込み合う

ことによって２つの基材１１１間のずれを防止する工法である。また、ダボ加工とは、互いに隣接する２つの基材１１１間に棒状体を基材１１１の長手方向に沿って互いに挿し込み合うことによって２つの基材１１１間のずれを防止する工法である。また、これらに代えて、筏本体１１０は、固定具１１５によって基材１１１同士のずれが生じない場合や、基材１１１間ずれが許容できる場合にはサネ加工、ジベル加工およびダボ加工を省略して構成することもできる。

【００４２】

また、上記実施形態においては、筏本体１１０は、把持部１２０のみを備えて構成した。しかし、筏本体１１０は、把持部１２０に加えて反射板、ＧＰＳ機器または発信機などを設けて構成することもできる。これらによれば、筏本体１１０の存在や位置を確認し易くすることができる。

【００４３】

また、上記実施形態においては、筏本体１１０における６面の全面に把持部１２０を形成した。しかし、把持部１２０は、筏本体１１０の表面から実質的に突出することなく設けられていれば、把持部１２０の形態、形状、大きさ、数および設置位置は適宜決定されればよく必ずしも上記実施形態に限定されるものではない。したがって、把持部１２０は、棒状以外に、十字状に形成することができるとともに、縄などの紐体で構成することができる。この場合、把持部１２０を十字状に形成することにより、把持部１２０の向きに拘らず把持部１２０を掴み易くすることができる。また、把持部１２０を紐体で構成した場合においては、紐体の一方の端部を自由端にしてもよいし紐体の両端部を筏本体１１０にそれぞれ固定することもできる。また、把持部１２０を紐体で構成した場合においては、平時においては紐体を凹部１２１内に収納しておくことにより筏本体１１０のベンチとしての妨げとならないようにすることができ、紐体自体を長く形成することができる。また、把持部１２０は、樹脂材の他、金属材料、木材または布によって構成することもできる。

【００４４】

また、把持部１２０は、筏本体１１０の筏側面１１８に設置することにより津波に流されている人が筏本体１１０を掴み易くなるとともに、筏本体１１０の筏表裏面１１６に設置することにより筏本体１１０が津波で転覆した場合や筏本体１１０の真下を流される人が筏本体１１０を掴み易くなる。

【００４５】

また、把持部１２０を形成する位置においても、上記実施形態においては、１つの基材１１１上および互いに隣接する２つの基材１１１間に跨るように形成した。この場合、把持部１２０を１つの基材１１１上に形成することにより、筏本体１１０が津波に流された際になどにおいて万一、筏本体１１０が破損して基材１１１が単体で分離した場合であっても津波で流された人が基材１１１に形成された把持部１２０を掴むことによって基材１１１を掴むことができる。また、把持部１２０を互いに隣接する２つの基材１１１間に跨るように形成した場合においては、把持部１２０が形成された凹部１２１内に溜まった水を２つの基材１１１間から逃がすことができ水が溜まり続けることを抑制して筏本体１１０をベンチとして利用し易くすることができる。

【００４６】

また、上記実施形態においては、筏本体１１０は、砂袋で構成した支持台１３０上に設置した。しかし、支持台１３０は、筏本体１１０を設置面Ｇから浮かした状態かつ非固定状態で支持することができれば、必ずしも上記実施形態に限定されるものではない。したがって、支持台１３０は、例えば、土嚢袋にセメントを充填することにより継時的に固化するように構成してもよいし、木材、石またはコンクリートブロックで構成することもできる。また、筏本体１１０は、設置面Ｇに直接載置することもできる。すなわち、筏ベンチ１００は、支持台１３０を省略して構成することもできる。

【００４７】

また、上記実施形態においては、筏本体１１０における筏表裏面１１６に逃げ面１１７

を形成した。しかし、逃げ面１１７は、互いに隣接する基材１１１の角部の少なくとも一方が凹状に窪んで形成されていれば、必ずしも上記実施形態に限定されるものではない。したがって、逃げ部１１７は、例えば、互いに隣接する基材１１１の角部の少なくとも一方を面取り加工することにより構成することもできる。

【００４８】

また、上記実施形態においては、筏本体１１０は、基材１１１を全て木材で構成した。しかし、筏本体１１０は、人を載せた状態で水にように構成されていればよく、必ずしも上記実施形態に限定されるものではない。すなわち、筏本体１１０は、基材１１１を木材に代えてまたは加えて木材以外の素材、例えば、樹脂材（発泡樹脂も含む）を用いて構成することもできる。また、筏本体１１０は、筏本体全体１１０として水に浮かべばよいため、基材１１１の全てが必ずしも水に浮く必要はなく、基材１１１の一部が水に浮かない材料で構成されていてもよい。

【００４９】

例えば、筏本体１１０は、筏本体１１０の外周部を構成する基材１１１が同外周部より内側を構成する基材１１１よりも比重が重い材料で構成することができる。具体的には、筏本体１１０の外周部を構成する基材１１１を木材、例えば、スギ（比重０．４）やヒノキ（比重０.５）で構成するとともに、同外周部より内側を構成する基材１１１をヒノキ材よりも比重が重い材料、例えば、樫（比重０.９）や鉄（比重７.８）で構成することができる。これによれは、筏本体１１０は、筏本体１１０の外周部を構成する基材１１１が同外周部より内側を構成する基材１１１よりも比重が重い材料で構成されているため、水に浮いている状態において筏本体１１０を安定させるとともに波や津波に流される人が掴まった際に筏本体１１０が転覆することを抑制することができる。

【００５０】

また、これとは反対に例えば、筏本体１１０は、筏本体１１０の外周部を構成する基材１１１が同外周部より内側を構成する基材１１１よりも比重が軽い材料で構成することができる。これによれは、筏本体１１０は、筏本体１１０の外周部を構成する基材１１１が同外周部より内側を構成する基材１１１よりも比重が軽い材料で構成されているため、筏本体１１０が漂流している場合において津波に流されている人が筏本体１１０に乗り込む際に筏本体１００を容易に傾斜させて筏本体１００に乗り込ませることができる。

【００５１】

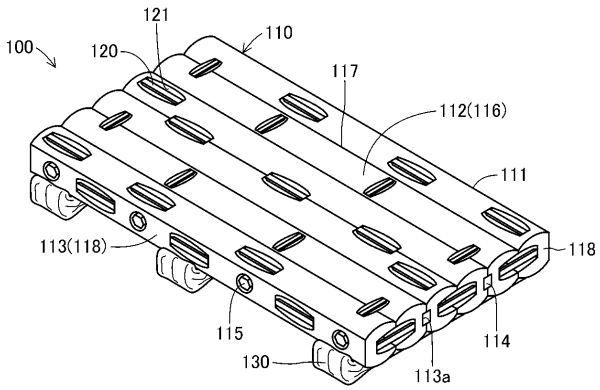
また、上記実施形態においては、筏ベンチ１００は、平時にはベンチとして使用した。しかし、筏ベンチ１００における平時の使用用途はベンチのみに限られず、例えば、机、作業台、踏み台または自転車などの軽量物の置台として利用することもできる。

【符号の説明】

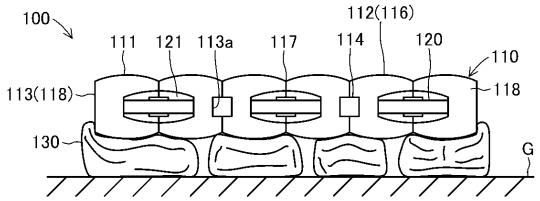
【００５２】

Ｇ…設置面、
１００…筏ベンチ、
１１０…筏本体、１１１…基材、１１２…基材表裏面、１１３…基材側面、１１３ａ…メスザネ、１１４…オスザネ、１１５…固定具、１１６…筏表裏面、１１７…逃げ部、１１８…筏側面、
１２０…把持部、１２１…凹部、
１３０…支持台。

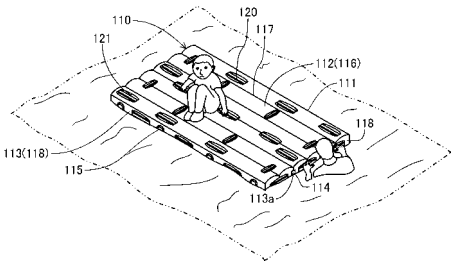
【図１】


100
121
120
110
117
112(116)
111
113(118)
118
115
114
130
113a

【図２】


100
112(116)
111
121
113a
117
114
120
110
113(118)
118
130
G

【図３】


110
120
121
117
112(116)
111
118
113(118)
115
114
113a